



らんの
イナん #2

夢の最終選考編

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

らのけんってどんなお話??

三郷^{みさと}学園高校「ライトノベル研究部」

——通称らのけん。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを主旨とした崇高な部活動……のはず、だったんだけれど……。アレ? 実際見たらなんか思ったよりなんかゆるくない?

駄菓子菓子! いや、だがしかし! それこそが「らのけん」の魅力! という感じで展開するまったり系日常部活コメディです!



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情径行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

らのけん顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。ラノベ大好き! だが酒乱。



赤城操

クールビューティーな眼鏡っ子担当。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。



黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦勞は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

「きゃー！ー！！」

「！！！！！！！！」

中間テスト最終日で静まりかえっていた三郷学園高校1年3組の教室に、突然絹を裂くような悲鳴が轟いた。

「なんだなんだ？」

「あれ、華ちゃん先生がいない？」

と、同時に教室がざわつき始める。

それもそのはずだ。

先ほどの悲鳴とともに教壇の横の椅子に座って、試験監督していたはずの担任教師・白井華子（25歳）が忽然と姿を消していたからだ。

「み、みなさん、静かに……あ、あたしは大丈夫です……」

やがて華子が教壇の上にゆっくりと顔を出した。

どうやら自身のあげた悲鳴と同時に椅子から転げ落ちてしまったようだ。

華子は身長が148cmかないため、背伸びして立っても教壇の上にかろうじて頭と胸が乗っかるぐらいにしかならない。しかしその状態のまま、彼女はざわつく教室に向かって落ち着くようにと必死に呼びかけた。

……しかし当の本人が一番落ち着いていないように見えるのは気のせいだろうか……。

「華ちゃん先生、どうしたんですか？ 急に大声で叫んで？」
一番前の席に座っていた三つ編み女子が心配そうに尋ねる。

「う、ううん、なんでもないの。ちよつとそこに虫がいて……びっくりしちゃっただけの……ごめんね、ごめんね、みんな、試験中に驚かせちゃって」

ぺこりぺこりと頭をさげながら謝る華子。
童顔のせいでほぼ小学生にしか見えない華子がそう言うと、まるでいたずらをして親に怒られた子供のようにしか見えない。

やがて「なーんだ、虫か、びっくりさせんなよー」華ちゃん、体ちっちゃいのに声はでけいな」でもやっぱり華ちゃん先生可愛いわー」などという声とともに教室は静まっていった。

キンコンカンコンコン……

「はい、テストお疲れさまー！ 今日の日HRは省略！ みんな気をつけて帰ってねー！」

答案用紙を回収した華子は脱兎のごとく教室をあとにする。

後ろの方で生徒が呼び止めるような声したが、華子は意に介する様子もなくそのままダッシュで職員専用トイレに飛び込んだ。

「ゆ、夢じゃないよね……」

トイレの個室に飛び込んだ華子は震える指でもう一度スマホのスイッチを入れる。

そこに表示されたのは大手ライトノベルレーベル・AG文庫新人賞の選考経過発表ページ。そして。

「きゃー……！！ やっぱりあるうううー！！」

華子は本日二度目の悲鳴を上げた。

なぜならそこには確かに華子の作品のタイトルがあったからだ。

ライトノベルの投稿を始めて早10年。

それは初めて最終選考に残った記念すべき瞬間だった。



「ふっふくん、ふふくん ふふふくん ふうくん」

ライトノベル研究部……通称「らのけん」の部室では、顧問を務める華子のご機嫌な様子で鼻歌を口ずさんでいた。

「華ちゃんどうしちゃったの？」

「判らないけど、今日は部室来てからずっとあの調子なんだよ」

「よっぽど嬉しいことがあったんじゃない？」

訝る「らのけん部員」の三人、青山一斗、黒田美玖、緑川萌の視線の先には、原稿を書きながら楽しそうに足をぶらぶらさせている華子の姿があった（※椅子が大きすぎて床に足が届いていないのです）。

「まさか、華ちゃん、またお酒飲んでるんじゃないや……」

「「えっ!?!」」

美玖の眩きに、一斗と萌は敏感に反応した。

無理もない、この3人は過去、酒乱の華子によって身の毛もよだつような恐ろしい経験をしているのだ。

「み〜ん〜な〜♪ どうしたの〜♪ もっとこつちおいでよ〜♪ 一緒にラノベ書こうよ〜♪ た〜の〜し〜い〜よ〜♪」

「「「」」」

原稿から顔をあげた華子がとても陽気な調子で3人に声をかける。

この感じは……やばい……！

「あの……華ちゃんせんせ……じゃなかった白井先生、もしかして酔っぱらってる？」

「そんなわけないじゃない〜♪ そもそもあたしお酒飲めないし〜♪」

おすおすと質問する美玖に華子は満面の笑みで応えた。

そう、過日の酒乱騒動の張本人である華子はそのことをまったく覚えていないのだ。酒乱とは得てしてそういうものである。

「「ふ〜〜〜」」

3人はひとまず安堵のため息をついた。

とりあえず命は助かった。

「じゃあ、どうして華ちゃん先生、今日はそんな楽しそうなんです？ 何かいいことあったんですか？」

萌がそう尋ねると、華子は待つてましたとばかりに足をさらにバタバタさせる。

「ん〜〜〜いいことっていうか〜〜〜まあ、そう言われればそうなんだけど〜〜〜なんて言うのかなあ〜〜〜そういうんじゃないかって〜〜〜」

ほんのり朱に染まった頬を両手で包んで、華子は「きゃー」とか「むふー」とかいいながらさかんに身をよじり始めた。

なにこの可愛い生き物。家にお持ち帰りして思う存分もふもふしたい。

「なになに、もつたいぶらずに教えてよ、華ちゃん〜」

美玖が好奇心に溢れた瞳で華子の隣に座りながらせがんでくる。

「えへへへ、じゃあ言っちゃおうかあ〜。実はね〜、あたしAG文庫大賞の最終選……」

「華子、いる?」

不意に部室の扉がちやりと開き、一人の女性が入ってきた。

「あれ? ひえちゃん? 今日では委員会じゃなかったの?」

神妙な面持ちで部室に入ってきたのはひえちゃん——氷川英子——華子の同僚の教師だった。ちなみに小学校以来の大親友でもある。

「あのさ、あたし、学校辞めることにしたんだ」

「え!?!」

突然の告白に華子は返す言葉も失った。

そのまま英子の顔を見つめ、金魚のようにぱくぱくと口を開いたり閉じたりしている。

「華子は知ってたと思うけどさ、ほら、あたし土日は声優のバイトしてるじゃない? それが学校にばれちゃってさ。うちそーいうの厳しいから教頭に呼び出してくって、あんまりガミガミうるさいから、それじゃ学校辞めて声優に専念します! って啖呵切っちゃったんだ」

「えー!?!」

てへぺろする英子の顔を華子はまじまじと見つめた。

しかし英子の表情にはどこか吹っ切れたようなすがすがしさがあつた。

「だからさ、これ華子にあげる」

「えっ!?! なんで!?! これ、声優の西山一樹さんのサイン入り脚本でしょう? ひえちゃんか

一番大切にしていた宝物じゃない?」

「だからこそ、華子に持ってほしいんだ」

英子は真剣な顔で言葉を接ぐ。

「今度はサインじゃなくって、本物の西山さんと仕事する。仕事ができるように、死にもの狂いで頑張る……だからこれは華子が持ってて」

英子は優しい瞳で、ふっと微笑んだ。

「……うん、判った。大切にすね」

華子は脚本を胸に抱きしめると、深く深く頷いた。

「じゃ、あたしはこれで。華子も頑張つてね!」

「うん!」

まるで一陣の爽やかな風のように英子は部室を去っていった。

あとにはサイン入り脚本を抱きしめて、ちよつと涙目になっている華子の姿があつた。

「へー、びっくりだねー、氷川先生、声優やってたんだー」

「うん、ひえちゃん、それが小さい頃からのずっと夢だったから……」

「すごいなんか憧れちゃうな」

美玖がテーブルの上のお菓子をぱりぱり食べながらため息混じりに呟いた。

「ひえちゃん、やっぱりすごいな……昔から夢に向かってまっすぐで……あたしも見習わな

きゃー！)

「あ、そうそう！ 結局、華ちゃんの嬉しい話ってなんだったの？」

「あ、それはね、実は……」

一斗の無邪気な問いかけに応えようとして、しかし華子はピタリと動きを止めた。そしてその額には、たらりと汗が一粒。

(もしかして……)

そのとき華子の頭にはある恐ろしい考えが浮かんでいた。

それは。

新人賞受賞 ↓ 作家デビュー ↓ 学校にバレる ↓ 速攻クビ

「ナナナナンデモナイノ。ナンカ キヨウハ チョット キブンガ ヨカッタケナノ……」

「「？」」

突然ロボットのようなしやべり方になった華子を、部員一同はぼかんとした表情で見つめる。

「アツ、ソウダ。アタシ ヨウジガ アルンダッタ。ソレジャ オサキニー」

ぎこちない愛想笑いを浮かべつつ、華子は部室をあとにした。

「なんだありゃ？」

「「よあっ。」」

一斗の不思議そうな呟きに、美玖も萌も首を傾げるばかりだった。



(だめだめだめ！ あたしひえちゃんみたいに意志強くないし……。学校にバレたら絶対作家の方をやめちゃうに決まってるし……。そんなのイヤ！ 絶対にイヤ！ だからAG文庫大賞のこと、絶対バレないようにしなくちゃ！ 学校にも、らのけんの皆にも！ ……そう、あたしは目指すのよ！ 栄光の覆面兼作家の道を！)

翌日放課後、決意も新たに、らのけんの部室に向かう華子の姿があった。

(平常心、平常心、自然体、自然体……。白井華子は今日もいつもの日常を送っています……。AG文庫大賞の最終選考になんか残ってません！……！)

らのけん部室の前で、深呼吸をしながら自分にそう言い聞かせる華子。そして勢いよく部室の扉をあける。

「やっほー、みんな元気ー？ 今日も張り切ってラノベ書こうねー！」

「「華ちゃん、おめでとー！」」

華子を迎えたのは一斗、美玖、萌の祝福の言葉と、クラッカーの盛大な破裂音だった。

奥のテーブルには大きなデコレーションケーキまで用意してある。

「な、なに？ どうしたの？ みんな？」

「まーたまた、とほげちゃって、華ちゃんん！ 華ちゃん今期のAG文庫大賞の最終選考、残ってんじやーん！」

「ひっ……!?!」

美玖がニコニコしながら最終選考ページをスマホで突きつけてくる。

あまりの急展開に華子は息を呑んで硬直した。

っていうか、何故バれてるし！

「ど、どうしてそれを知……じゃなかった、アタシAG文庫大賞ナンテ応募シテナイヨ？」

「え？ だって、この『炊き出し戦隊スイハンジャー』って華ちゃんの作品でしょ？」

「ひっ……!?!」

萌に凶星を指され、華子は再び硬直する。

「ナ、ナンデ、ドウシテ……?」

「どうしても何も、華ちゃん、この原稿……この部室で書いてたじゃん」

「……（コクリ）」

「華ちゃんって原稿が乗ってくると、文章全部口に出しながら執筆するじゃん？ だから丸判りなんだよ。これ書いてるときだって『くらえ！ 必殺黒釜圧力スプレッシャー！』とか『こ

れでとどめよ！ 三段炊き出しスチーマー！』とかって叫びながらノリノリで書いてたじゃん〜」

「ひいひいひいひい〜」

華子は梅図かずおバリの「ひいひいひい顔」になって部室のテーブルに突っ伏した。

（あ、あたしこれ声に出しながら書いてたの!? ヤダ、全然気がつかなかった！ ……じゃ、

これまで書いた作品も全部そうしてたつてこと!?! はわわわわ、恥ずかしいひいひい〜！ 穴があつたら入りたい〜！）

華子は捨てられた子猫のようにぶるぶると震えながらさらに身を縮こまらせた。

「でもさあ〜、華ちゃん。なんでこんない知らせ隠してたの？ 知つてたらすぐにもお祝いしてあげたのに〜。ね〜?」

「そうだよ〜」

「何かね、騒々しい」

不意に開けっ放しの部室のドアから低音の声がした。

見るとそこには禿頭で恰幅の良い本校の教頭が立っていた。

「何かね、このクラッカーの残骸は……そしてそのケーキ……。一体君たちは学校の部室で何をやってるんだね？」

「えつとーですな〜、これは華ちゃんがAG文庫の最終……」

「た、誕生日パーティーなんでーす!!」

「「はあ?」」

らのけん部員一同がぼかんとする。

「不肖・白井華子、恥ずかしながら本日をもって生誕26年を迎えました! そ、それを愛すべき生徒たちが祝ってくれたという次第であります! 他にやましいことは何もありません! 何もありませんー!」

なぜか教頭に対して最敬礼をしながらしゃちほこばった言い訳をする華子。

「ま、そのぐらいなら大目に見んこともないが……部の趣旨に無関係な活動は極力控えたまえよ」

「御意にござりますー!」

去っていく教頭の背中に深々とお辞儀をする華子。らのけん部員一同はそれを呆気にとられて見つめるだけだった。



「……というわけで、最終選考のことは学校には絶対バレないようにしてほしいのっ」

「ああ、なるほど、そういうことですか」

「確かに華ちゃんクビになったらあたし達も困るもんね〜」

両手を合わせて拝み込むように懇願する華子に、ようやく納得いった様子で頷く一斗と萌。

「良かった、二人とも判ってくれて〜。あれ黒田さん、何して……あああああ!!」

華子は速攻で美玖からスマホを奪うとその電源を切った。

「何すんのよ、華ちゃん〜」

「い、今、LINEに最終選考のこと投稿しようとしたでしょ!?!」

「大丈夫だよ、身内しか入ってないLINEだから〜」

「だめ! 秘密っていうのはそういう風にして漏れていくの! 『壁に耳あり、障子に目あり』なんだから!」

「なんだよ〜けち〜」

美玖が唇を尖らせて抗議する。

「でも、すごいよね〜、華ちゃん。作家デビューなんて〜」

「ま、まだ決まった訳じゃないから。気が早いわよ、緑川さん」

「もしデビュー作がめちゃくちゃ売れたらやっぱりアニメ化とかされるのかな?」

「アニメ化……」

一斗の言葉に、華子の中で無限の妄想が膨らみ始める。

デビュー作がめちゃくちゃ売れてあつという間に100万部……アニメ化、ゲーム化……世界中

に翻訳されるあたしの本……いずれ各地に白井華子ワールドが建設され……

「華ちゃん、華ちゃん。よだれ。よだれ出てるって！」

「は、はわわわ、じゅるるる……」

華子は慌てて「とらたぬ」の妄想から現実に戻る。

でも。

でももしアニメ化なんてことがあつたら、絶対ヒロインの声はひえちゃんにお願いするんだ……！

そう、心に決めて華子は小さくガツポーズを決めた。

その瞬間。

モンスター〜ト モンスター〜ト

「電話だー………あっ!？」

ポケットから出したスマホを持って固まる華子。

キミはモンスターベアレンツ〜ト

「どうしたの？ 華ちゃん、出ないの？」

「それにしてもすごい着メロだね、華ちゃんのスマホ……」

「はわわわわわ、ど、どうしよう、知らない番号からだ………も、もしかしたらAG文庫編集部からの受賞の連絡かも……！」

スマホを持つて部屋の中をわたわたと行き来する華子。

「ね、受賞の連絡ってそんなに早く来るもんなの？」

「よく知らないけど、最終選考結果発表の1週間くらい前には来るらしいよ」

「へー、そうなんだ。じゃ、その可能性もあるのね」

美玖と一斗がそんなやりとりをしている間も、華子はスマホを持ったまま部室をぐるぐる回っている。このままバスターにならないか心配なぐらいいの勢いだ。

教師は職場うつ発症率が一番高い危険な仕事〜ト

「あゝ、もうじれったいな〜」

「あっ!？」

美玖が華子からひよいっとスマホを取り上げる。

そして。

「はい、白井でーす♪」
勝手に出たー！ー！ー！

「はいはい、そうですけど？」 ところであんた誰？」

(ちよつ……黒田さん、何勝手にあたしのスマホで喋ってるの……?)

あまりの事態に華子はあわあわしながらも、その場を動くことができない。

「うっせーよ、ばーか！ もう2度とかけてくんない！ タコが！」

「はわわわわー!？」

美玖のあまりの対応に、さらにあわあわする華子。

当の美玖はどこ吹く風という様子で、プチリと通話を切った。

「なんの電話だったの？」

「オレオレ詐欺」

「「はあ？」」

美玖の意外な応えに華子、萌、一斗は目を丸くする。

「なんか、ずーっと『華ちゃん、俺だよ、俺。わかる？ 俺？』ってしか言わねーから切った」

「ちよつ……それ、あたしの名前を知ってるってことは知り合いの人じゃない！ ちよつと黒田さんスマホ返して！ 折り返しこっちから……って番号非通知じゃない！」

「まあまあ、とにかくAG文庫大賞の件じゃなかったからいーじゃん♪」
「良くないわよー！」

華子は美玖のお腹をぼかぼかと叩く。しかしまったく効いていない。

「はあ……でも本当にAG文庫編集部から電話だったら良かったのにな……」

華子はスマホを握りしめて溜め息混じりにそう呟くのだった。

◆
それから受賞通知の電話を待つ華子のじりじりとした生活が始まった。

最終選考結果発表表4日前。

電話なし。

華子、身悶える。

最終選考結果発表表3日前。

電話なし。

華子、スマホを見過ぎて教頭と正面衝突。大目玉をくらう。

最終選考結果発表2日前
電話なし。

華子、「こんな生活もうイヤ！ もうあたしからA G文庫編集部に電話をかけてやるわ！」
とばかりに電話しようとして萌と一斗に必死に止められる。ちなみに美玖だけはニヤニヤしながら「電話したらいいじゃん。面白そうだし」とけしかけていた。

最終選考結果発表1日前

電話なし。

やめて。華子のHPはもうゼロよ！



そして最終選考結果発表の日。

らのけんの部室で、華子は死体になっていた。いや、正確には死体のようになっていた。

「ないよーないよー……」

もう何度繰り返したか判らない呪詛じゆそのこもったつぶやきを繰り返しながら、華子はテーブル

に突っ伏していた。

手にしたスマホに表示されているのは最終選考結果発表のページ。

何度見返しても、受賞作品の中に「スイハンジャー」の文字はない。

そう、華子は最終選考で落選してしまったのだ。

「ぐすっ……ぐすっ……今度こそ、今度こそは受賞できると思ったのにい……」

「まあまあ華ちゃん、次の賞で頑張ればいいじゃん。」

「そーだよ、最終選考まで行くってことは才能あるってことだよ！」

一斗と萌が優しく励ましてくる。生徒が先生を慰める……通常とは逆のこの光景だったが、傍目には「落ち込む妹を慰めるお兄ちゃんとお姉ちゃん」にしか見えなかった。

「無理だよースイハンジャーはあたしの最高傑作だったんだからーそれを否定されたってことはーあたしのすべてを否定されたってことなんだよーだから一生デビューなんてできないってことなんだよー……」

「そんな大げさな……」

「大げさじゃないもー……ほんとにほんとに最高傑作だったんだもーん！ うそじゃないもーん！」

スマホを持ったままテーブルの上でじたばたと駄々だだをこねる華子。

なにこの可愛い生き物。

家にお持ち帰りして思う存分くんかくんかしたい。

「でもさ、マジ面白かったよ、華ちゃんのスイハンジャー」

「え？」

華子が顔を上げた先には、スイハンジャーの原稿をめくる美玖の姿があった。

「特にスイハンレッドがスイハンピンクに告るシーンとかあたし好きだったな。あとスイハンイエローの釜飯への異常な執着が面白かった」

「でしょ？ でしょ!？」

自作を誉められてやおら元氣を出し始める華子。

「……って、黒田さん、スイハンジャー読んでくれたんだ……」

「だから自信持って次も書こうよ!」

美玖にばんばんと背中を叩かれる華子。

「……うん、そうだよね。ここで諦めたら今までの努力が水の泡だもんね」

華子は拳握って立ち上がった。

「あたし、頑張る! 次こそは必ず受賞してみせるわ!」

「その意気だよ、華ちゃん!」

「やっぱり華ちゃんはこうでなくちゃ!」

華子が復活したことで、やっと部室に賑わいが戻ってきた。

「よーっし! あたし新作書いちゃうぞー! スイハンジャーの3倍くらい面白いのをばんばん書いちゃうぞー!」

華子のご機嫌な様子でパソコンの前のキーボードを叩き始めた。

その時。

モンスター〜♪ モンスター〜♪

「あら、電話だわ? 誰だろ……って、AG文庫編集部!？」

スマホに表示された発信元を見て華子は驚きの声をあげた。

そして恐る恐る震える手で「通話スイッチ」を押す。

「も、もひもひ、白井でふー!」

緊張のあまり、華子は噛み噛みだった。

らのけん部員一同もただならぬ事態に、華子のスマホに耳を寄せ固唾を飲む。

『突然のお電話ですみません。わたしAG文庫編集部の紺野と申します』

「は、はひ!」

『今回ご応募いただいた【炊き出し戦隊スイハンジャー!】、惜しくも選には漏れましたけど、とっても面白かったです。私、貴女ならきつともっと面白い作品を書けると思うんです』

「ふえ？」

「なのでもしよろしければ、わたくしが担当につきますので、一緒にデビューまで頑張ってみませんか？」

「ふえええええ!!」

あまりの展開に華子はスマホを持ったまま硬直した。

ライトノベルの新人賞では、受賞は逃したもののその才能を見込まれて担当編集がつく、といういわゆる「拾い上げ」というものがある。華子はめでたく「拾い上げ」られたというわけだ。

『どうですか？ 白井さん？』

「は、はい！ あ、あたし頑張ります！ 頑張っちゃいます！ めっちゃめっちゃ頑張っちゃいます！ よろしくお願ひしますー！」

華子の大きな返事とともに、美玖・萌・一斗の歓声があがる。

それは夢の覆面兼作家誕生の瞬間だった（※まだデビューしてないけど）。

つづく